

人生歌集「風」

(二)

多谷昇太

―海を渡る風―

波はるか酔ひどれ船を見ましかばいつしか
乗りぬおのづからなり

※ランボーにあこがれて横浜からソ連客船ジェ
ルジンスキー号に乗り、シベリア鉄道経由で
ヨーロッパに旅立ちました。四十三年前のこ
とです。

若人のメツカなりしかオランダはアムステ
ルダムに我は居りしも

集ひ来て寝ばや此処にし若人らフンドルパ
―クは自由開放地

※夏の間だけ世界各国から来る若者たちに市が
公園を宿泊地として開放していたのです。

男女別よに設けぬユースありその名を云は
ばアダム&イブ

※寝室もシャワーも男女皆いっしょです。いい
んですかね？

銭盗られ無一文なる我にさへ食住たまひし
人類の祖や

※財布を盗られました。ただトラベラーチェツ
クだったので再発行してもらえましたが、そ
れまで無一文。しかし親切にも後払いの約束
で人類の祖は私を養ってくれたのです。

「ヘイ、ユー！」と我さし怒る黒人は街角
我を抱きし者ぞ

※街角でいきなり見知らぬ黒人の青年に抱きつ
かれました。「おお、何と哀れな！」とか英語
で云いながらです。私がしょぼくしてたから
でしょう。なぐさめようとしたのだと思いま
す。しかし私はおどろいて彼を突き飛ばして
しまいました。アムスには当時そんなコミユ

ニテイ的雰囲気があったのですが：

飾り窓に立ちし女の寂しげに我（わ）を招きしはなんのこころぞ

※通りすがりの、粗末なヒッピースタイルの私を客とは見ないでしょうに、なぜ手招きしたのでしょうか？

父母（ちちはは）も貧しき家もかへりみずなにゆゑ我はここにあそぶや

俳句一句…我はこの何のかひなき長男坊

秋さればぬるものかは職得べしこれより我は大陸ポヘミアン

※ヨーロッパの緯度は北海道より上、寒いです。

私は急ぎ住込みのバイトせねばなりません：

マリアなるエーデルワイスの白き国ここぞ

と頼み我は来にけり

湖（うみ）ほとり白き家あり額づかむクルスのみまへ我罪ふかし

※スイスはルツェルン市、同湖のほとりに白い教会がありました。その側面にはりつけにされた等身大のキリスト像が。主はすべての人々の為に身をささげました。それに比べて私は：

カペル橋その美しきに目もやらで渡る人ありヤーボンと見しが

※もちろん私です。観光名所どころじゃない、住み込みのバイトがなかなか見つからず、あせってました。人種差別にも閉口していて、眉をしかめた、その嫌な顔と云ったら：

おおマダム、ヨーヨーとばかり鷹揚に我を雇ひぬ何と拝まむ

※月給八百フラン（九万位）、住み込み二食付きの、夢のような条件で雇ってくれた。ヨーと

はドイツ語のヤーの、目下に対する云い様。
金髪の五、六十くらいの女社長。女神のよう
に見えました。

往年のスイス美人か賄ひ婦生（あ）れて八
十年（やそとせ）国ゆ出でざるとぞ

※七、八十才くらいのキツチンの下働きの老婆
さん、過去一度も国から出たことがないそう
です。この小さなスイスから：信じられませ
んでした。

名をばリーザ「ズイー（あなた）」と呼べば
さも応じ「トウー（おまえさん）」と呼べば
ほおふくらましき

我（わ）を呼ぶにヤーポンが常にして数多
鼻かめど憎めず愛らしき

調理場は常に前掛けシンデレラ偶のドレス
アップに驚かされぬる

わが視線受けて顔をば赤らめぬ海外旅行と
ぞ可愛きリーザ

※初の海外旅行先は隣国オーストリアとか。行
つてらっしゃい、リーザ。楽しんでらっしゃ
い。

ノックありドアを開ければ人の腹見あげて
いけば笑みしガリバー

※あとから入ってきた住み込みのバイト同僚。
身長一九二C㉔のオランダ人青年。一九才だ。
ガリバーと云うよりはサムソンか。

サムソンは誰彼かまはず嘲笑ふなりされど
憎めず皆に好かれき

誰か知るホテル・キュッフエはリングダ上と
ヤンとシェフつと殴りあひぬ

ルツツエルン美しきまち湖のまちホテル・

ボーイとぞ我を呼ばふは堪へかね睨み合ひ
しがマリア止めくれぬ

※二五才の私をヤンが「ボーイ」とからかう。
思わず睨み合ってしまった。サブシエフのオ
ーストリアの女性コック、マリアが間に入っ
てくれたからよかったが、もしそうでなかつ
たら…容易に想像つく。

汝（な）の指は汚れてゐぬかとヤンが問ふ
事故死せし両親その写真見せしとき

※旅客機事故で両親を亡くしたと涙ぐんでヤン
が云う。彼の気丈には訳があった…。

※「ボクシングをやっていた」「ほんとうか？」
などどつまらぬことで殴り合い。手加減され
たがシエフはすぐに叩きのめされた。

イルゲへ人よいざたまへ

※宣伝しちゃいます。ルツツエルンへお越しの
折りはホテル・イルゲへどうぞ。

